

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第186号（2021年11月）



白井啓治

（二四）空洞のない生産活動

（2008年10月16日）

『秋の陽に背中押されて』

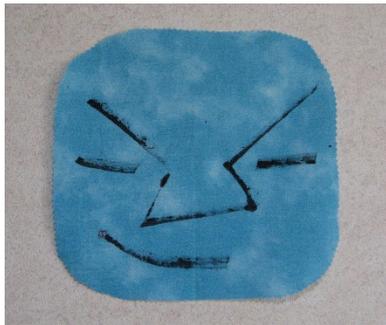
今の季節は丁度新米古米の入れ替わる端境期で、食いしん坊の私には嬉しい時期である。しかし、ぶらりぶらぶらと眺める木々の風景は、中途半端で、一年の中でいちばん美しくない季節と言える。今が盛りと金木犀の匂いだけが辺りを甘く染めているが、却ってそれが濁った風景を際立たせている。さかりの過ぎたコスモスが枯れようかどうかと躊躇いながらも遅れ花を咲かせているやるせない季節でもある。

散歩道の雑木林も、もう少しすると葉がしつかりと色づき、やがて葉が落ちて鋭く容赦のない枝になつていく。そして木枯らしを切り裂いて冷たくヒュウと鳴くようになる。しかし、その声には春を信じる頑なさがあつて、希望を思わせてくれる。

移ろう季節というのは、四季であろうが、雨季と乾季の二季であろうがそこには確実な希望が託

されて在る。人は、生物は移ろう季節とともに命を紡いでいる。

サブプライムローンの問題に端を発して実体のないアメリカの金融経済が破綻し、世界的な経済恐慌の嵐が吹き荒れようとしている。秋口から、週に一度百姓という贅沢の手伝いをしに出かけているが、実体のある生産には空洞がない。実体のない投資によつて寝ても利を生みだすことは決してない。雑草を耨るといふ実労働の投資がないと、作物は育ってくれない。薬剤を使って天敵の雑草や虫を殺して寝転がって実りだけを腹に満たそうと考えると、必ずそのつけが回ってくる。



（絵：兼平智恵子）

金融経済に実体がないのではなく、実体のない金融経済を動かしてはいけなないのである。人間の発明の中で、お金は神に次ぐ発明品であると思う。しかし、優れた発明品には必ず隠れた歪みを持つ

## ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

ているもので、油断して実体なく発明品に溺れているとんでもない悲劇に襲われるものである。実体なく空論していて実害のないのは、禅問答ぐらゐのものである。ところが禅の語録を実体をもって考えると、よほど覚悟して自分に対峙し、律することが必要になつてくる。

秋の夜の一人ごとではあるが、禅の語録だけは実体のない空論が良い。

（本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。）

地域に眠る埋もれた歴史(74) 木村 進

【6 真家・瓦会・有明地区】(5)

雲照寺 石岡市瓦谷

瓦会郵便局のところから柿岡方面に少し行った右側に「雲照寺」があります。

常明山寶聚院(ほうしゅういん)雲照寺。真言宗豊山派です。

文明2年(1470)に慶阿闍梨によって葦穂村(今の足尾山の麓)に建てられたという。

その後、天文年間に兵火で焼失したが、片野城の城主の太田三楽斎(太田資正)が再建したといひます。



その後、柿岡城にきた長倉(佐竹)遠江守が修理したとされるが、慶長年間(1596~1614)に一時廃寺となった。

しかし、元和2年(1616)に宥岳上人が現在地に再興したとされます。この宥岳上人はどの

ような人かは調べたけれどわかりませんでした。寺の山門です。古びた門と手前の紅葉に落ち葉がともいひ秀麗気です。

この門は内側の両側に小屋根がありますので「高麗門」です。

江戸時代に部家屋敷などの門として使われました。石岡の陣屋門も同じ様式です。



弁財天堂

昭和60に法隆寺の夢殿を模して再興したもの

この寺は庭園や各堂宇などを新築したようです。

山門を入ったところに梅の木がたくさん植えられています。

遠くの山と寺の堂宇や梅や楓の美しい寺でした。

この寺の歴史もかなり古いようですが、途中で廃れた時もありよくわからないようです。

加波山神社などとのつながりや京都醍醐寺三宝院の末寺などとの記述もありますがよくわかりませんでした。

6.7 有明の松 石岡市中戸

南北朝時代に常総における南朝方の拠点となって攻防が繰り返された難台山城にまつわる伝説が残されている「有明の松」。



瓦会から大増方面に向かう県道42号線の道路に面して(バス停有明)記念碑が立っています。裏手の難台山には雲がかかっています。難台山城の攻防

後ろに見える難台山(Difficult Mountain)には、県指定史跡の「難台山城跡」がある。南北朝時代(1380年)、南朝方の小山義政が難台山中に城郭を造り、足利軍と合戦(小山義政の乱)して破れ、さらに、1387年、小田五郎藤綱と義政の子・若犬丸が、再度、難台山に陣を構え(拠点であった小田城(祇園城)を追われてここに

陣を構えた)、北朝足利方の上杉朝宗と合戦した山です。8か月に及ぶ籠城、攻防の末、食糧供給の道を遮断され、食料が尽き難攻不落の要害もついに落城してしまいました。藤綱は城を焼いて自害し、若丸丸は逃亡、小田五郎は郎党百名あまりとともに討ち死にしたと伝えられています。

この時に、難台城の婦女子が夜を徹して山を下り、この松の下に集まり、夜を明かしました。その時に見た夜明けの空が大変すばらしかったので「有明の松」と名付けられたと伝えられています。

昭和41年3月7日県指定の天然記念物となったが、昭和55年松くい虫のため伐採された。この奥の山が難台山(標高553m)である。ハイキングにも人気がある。難台山は昔南台丈とも呼ばれており、約180年前の江戸時代に平田篤胤が書いた「仙境異聞」で寅吉が天狗に連れてこられ、最初に降り立った山でもある。

現在の松は、親木から採取した種子を発芽させたものであるとのこと。

この松にまつわる話は、南北朝時代末期といえますから、今から700年以上も前に起きた出来事です。

(今回で八郷地区の紹介を終わります)

## 海外旅行の思い出(6) 木下明男

二度目の海外旅行も、ベトナム民主共和国へ……

1978年1月にベトナム国立中央歌舞団を成功させる取り組みとして、全国から300名(2回に分けて)の交流団を、戦禍が癒えていない南ベトナムへ送った。その年の5月に来日した歌舞団は、多くの日本人に感動を与えてくれた。帰国したベトナム歌舞団は、報告会に赤旗支局長の木谷氏を招き、日本で受けた歓迎に謝意を伝えた。木谷氏は、「驚いた……公演の成功は知っていたが、ベトナムの文化・芸能、マスキ、政界、国際団体の要人たちが挙って、最上級の感謝を伝えられた」そうです!日本では、歌舞伎座を借り切って、ロビーで帰国報告会を開いたようなもの。それには、今まで韓国や日本で招かれた別のベトナム芸術団は、とても文化交流的な扱いがなく、それは酷いもので契約破棄をして逃げ帰ったこともあった。このような背景の中での成功に対する謝意だったようです。

この成功を更に、多くの労音で地域の隅々まで届けられるようにと、小編成の「民族楽団」を招聘することを決めた。1979年2月に、ベトナム民族楽団の日本公演を成功させる運動の一環として、労音代表団一行13名(団長・木下明男東京労音副委員長)はハノイを訪問した。折しも、中国軍によるベトナム侵攻という大変な時期だったが、ハノイ市民は全く平穏で、生活感溢れた表情に目を見張った。ハノイ滞在中、

赤旗特派員の高野記者(私たちが帰国後中国の爆撃により死亡)から、ベトナムの状況を色々聞くことができた。特にハノイの街は、市民は、北爆の最中でもその表情は今と全く変わらなかったと……

それでも、私たちはハノイ市内には中々近づく事が出来ず、数日間市外を転々と巡る状態だった。そして、数日後市内に入ると、歩道には蝸壺のような穴が随所に、市内爆撃の折にはここから高射砲で応戦するとか?緊張感でいっぱいだったが、市民は平穏で戦時化の様子は全く感じられなかった。我々5日間の行動を記す。代表団行動メモ

● 2月18日(日)  
成田空港発、同日バンコック着、泊

● 2月19日(月)  
バンコック発、ビエンチャン経由、ノイバイ空港(ハノイ)着、ハイフン省ハイズオンホテル泊

● 2月20日(火)  
文化通信省芸術公演局長「サウ氏」の講演「ベトナムの文化芸術建設について」を拝聴。午後、対外文化連絡委員会を表彰訪問、議長代理「フー・ゴック・ウイ氏」と会見。ハイフォン宿泊。

● 2月21日(水)  
ハノイから北西60キロ離れた、ハソンビン省にあるフォン寺の外国人専用ホテルに宿泊。此の日の夜、ホテル従業員によって組織されている、アマチュア文工隊と労音代表団との文芸交流。

● 2月22日(木)  
ホテルから山頂にあるフォン寺迄、石段を1

時間ほど登る。午後からハノイに入る、そして夜はサーカス見物。ハノイ市内の「ラ・タイ・ホテル」に宿泊、以降帰国まで同ホテルに宿泊。

● 2月23日（金）

ベトナム労働党機関紙「ニヤンザン」編集局を訪問し、編集局長のフォン・テューン氏と会見。午後には、歴史博物館を見学。夜、文化通信省主催のレセプション。文化通信省次官「フエン・トローン氏」を初め、幹部及び対文連、音楽出版社の幹部が出席。

● 2月24日（土）

朝、ホーチミン廟へ、午前中来日予定の民族楽団員との交流。午後赤旗ハノイ支局を訪問、宮本支局長・高野特派員と懇談。夜、民族楽団試演会。

● 2月25日（日）

午前、ベトナム中央チエオ劇団を訪問し観劇と交流。午後市内見学と買い物。夜、前年に来日したベトナム国立歌舞団の副団長（ヒエン氏）や芸術幹部のホアン・フン氏、舞踊のピン・ハ氏夫妻、トウ・ズン氏夫妻と交流、日本の出し物（ソーラン節・青春）を披露し一緒に踊る。

● 2月26日（月）

ハノイ空港発ビエンチャン経由バンコク着ホテルで日本のメディアからベトナムハノイの状況について取材を受ける。市内見学、水上市場やコブラ等を見学。

● 2月27日（火）

バンコク発香港経由成田着。  
今年、アフガニスタンから撤退したアメリカ軍は、大混乱を極めた。40数年前も同様に、アメリカ軍がベトナムから撤退を決め、大混乱の

中アメリカ軍や軍関係者、そしてアメリカに協力した傀儡軍関係者たち・・・？今報道されているのと、同じような景色を見た。そして、その後何年もベトナム難民たちが、小舟で脱出を企て日本まで辿り着いた者たちもいたようです。歴史は繰り返すといいますが、アメリカは懲りないですね・・・？世界大戦後、アメリカは世界の憲兵として謁見していた。この図式が、東アジア・アフリカ・中南米地域の独立を含めた戦いが、アメリカ・ヨーロッパをはじめとした西側と言われる社会に一撃を与え始めたようです。同時に、東側と言われた国々にも矛盾と亀裂が起り始めたようです

和子さん！

伊東弓子



残暑も感じないまま涼しい日が続いたせいか彼岸花も早く咲いた。彼岸の入りの翌日は十五夜なので庭掃き掃除をしていた。そこへ友が慌ただしくやってきた。

「和子さんが亡くなった」

私にとっては尊敬する先生だった池上和子さん。友としても長い長い月日を共有してきた。駆けつけてくれた日さんと三人娘だった。覚悟はしてい

たがこんなに早く別れるとは人の世の常か。  
“年老いたら三人で山で暮らそう。畑で野菜を作り、食事も交代で、買物に出かけ、勉強もしよう”。  
こんな夢の生活を話していたのはついこの間だった。十五夜の月が、小松館のあった辺り、見まい、聞くまいの坂で谷津田の先の里山の上に、大きく輝く姿を現した。夜は和子さんに会うことを考え、とにかく明日は行くという思いで床に就いた。火葬になる前に会いたい、会おうという思いだけだった。

翌朝、いづみとの散歩は早く済ませることばかり考えて歩いた。歌と涙が止まらなかった。

一、人のこの世はながくして

かわらぬ春とおもいしに

無常の風はへだてなく

はかなき夢となりけり

二、あつき涙のまごころを

みたまの前にささげつつ

ありしあの日のおもいでに

おもかげしのぶもかなしけれ

三、されど仏のみ光に

撰取（せつしゅ）されゆく身にあれば

おもいわずらうこともなく

とこしえかけて安からん

行く道々では、和子さんとの出会いからの日々を思い出していた。

大学卒業と同時に玉里を選んで、社会教育主事として赴任して来られた昭さん・和子さん夫妻の

歓迎会を青年会が主催した。その席におられた可愛らしい姿の和子さんとの始めての出会いだった。同年代だった私も間もなく結婚し、母親同士の付き合いが始まった。子育てのこと、安全な食べ物、湖をよごさない石鹸洗剤のこと、勉強したり活動した。少年期に入った子供の問題、悩みも優しく指導してくれた。

高等学校の日本史教師の資格を持ちながら、それを断念し、石岡の笹目先生の下で古文書を学び始めた。日本史という下地のある彼女は、茨大の聴講生になり、その後は各地の図書館から国立図書館迄、調査研究に出かけて力を貯えていった。次々に活動が展開されていった。石岡の儀間きみ先生の生涯（一世紀）を時代の中で活動してきた女性の姿を描いたのを切っ掛けに「産婆さん」「機織してきた農村の女」の姿を聞き書きから文章にし、作業として実行していった。機織は種を播くことから始め、糸を紡ぎ、色を染め織っていく、そして織った布を洋服に、バックにと活用していく。土浦博物館での十年、県北西塩子の農業歌舞伎の大幕づくり、小川にも後をついだ人達の活動がある。そして、和子さんの傍らにはよい相棒であるKさんが常にいたことを忘れてはいけない。

その間も一貫して古文書調査は続けられていた。石岡・土浦・県西方面・小川・玉造にと活動され、玉造の大場家の文書の整理は大掛かりだった。そして町史、村史編纂への協力も惜しまなかった。私にも早くから声がかかっていたが、ずるずるとして結局仕事をやめる二三年前からと遅れてしまった。

「お手伝いします」と意気込んで言うと、「お手伝いではだめよ」と即返事がかえって来た。

自分から決断し取り組んで実行していくことだった。そして和子さんの気持は、

これから玉里のことに集中してやっていくので、他の活動は全部打ち切りました。それぞれの箇所です。リーダーが育っているのです、後はその人達におまかせします。

と、九人のメンバーと昭さん（当時は館長）、和子先生の十一人で出発した。村内からお願いのあった文書を読み下し、現代文で一冊にまとめた。文書は保管か、寄託かと、活動していく中で、古い物を大切に扱う意義・意味がわかっていった。石佛調査のし直し（年号の間違い訂正）をした。村内を歩き野佛に会うたびに歴史を感じ、願いをかけた遠い日の人々を思った。そこにはこの土地への愛着がより深まった。その頃、合併前に村史発行という難題が館長に申し掛かった。

「玉里御留川、稗倉」を手がけ始めた頃であり、きつと、昭さん（館長）、和子先生にとっては、私的な時間を割いての作業の日々だったのだろう。力のない私にとっては週に一度の御留川勉強会、作業日が楽しみで行く事が力になっていると自分では自負していた。二階の集会所での作業は館山神社の森の若葉で目を休め、蝉時雨も汗を拭き、散りいく木の葉の彩りに心安らぎ、小雪の舞う中に歴史を感じながら四年半の月日の中で作業は進み、水戸藩、玉里御留川の本が出来、講演会も行われて地域の人達への紹介も済んだ。「さあ、これからみなさん（私達一人一人）達が、どう伝え、どう活用していくか、宿題よ」その言葉が、声が耳から離れなかった。頭から離れることはなかった。どう伝えるか、どう活用していくか、昭さん、和子さんの時間的ご苦労と報

酬もなく逆に出費しながらの奉仕に報いなければならぬ。ただその事がわからず屋のW村長・無理解な田舎議長達はただ急がせるばかり。おまけに主要な所には、玉里の事など凡そ知らない人の名があった。和子先生には大場家のあらたな文書が出て来た整理で、よりご苦労が増えたらうに、それにめげずに作業が続いた。大場家土間の一箇所には高浜のKさんの二枚の絵が、古い歴史のある建物の一隅を照らしている。人の能力を活かしてくれるよき指導者であった。大場家の歴史と水戸藩時代、文書の整理から見えてきた集大成として講演会が開催された。霞ヶ浦周辺の歴史、文化を掘りおこし、よりわかりやすく私たちに教え導いてくださった先生の大仕事に区切りがついて長野伊奈へ行かれることになった。

和子さんの「お別れ会」では

「私は玉里で育てられた娘です。長野（伊奈）へお嫁に行きます。遊びに来てね。迎えに来てね」の挨拶の一言が頭に残っている。どんなにか心淋しい思いだったことか。その時に、

「検査の結果もわかるのよ」

と言っていたことが耳から離れない。一年前に先に戻った昭さんの所へ帰って行かれた後だった。

古文書のK先生から、厳しい言葉を頂いた。

「いくら惜しいひとだったとか、村・地域のことをやってくれなかったと口でばやいていてもだめ、何の解決にもならない。よくわかっている人が行動をおこさなくちゃ」との、お叱りを頂いた。

全く、私も振り返って見たが仕様がな。私が着く迄、その俣の姿でいてと、心優しい伊奈の住職と玉里の住職に何度祈っていたか。大分前、和子さんから「伊奈の住職さんは玉里の住職さんと交

流があつて親しいそうね」と聞いたことがある。又、玉里の住職からも「伊奈の住職さんは先輩でご指導いただいているんです」と聞いたことがある。その時、これもご縁かと思つていただけだったが、昭さんのお葬式には驚き、また感動した。式の後、「昭さんの玉里での生活、たまりの寺建立の際、昭さん、和子さんご夫婦の力を頂いたと聞いております。玉里と伊奈は遠くて近いご縁で結ばれております。」とお話ししてくださいました。その後和子さんがご住職のお部屋に紹介され、お話しする機会を頂いた。こんな丁寧な温かいものはご住職、和子さんの心そのものだと思つた。今回はご住職にお会いすることは出来なかった。玉里での和子さんのことを話してできなかったのが残念だった。

伊奈では石佛が森の角、畔で出迎えてくれた。母屋と娘さん夫婦の家の玄関が向かい合つているのも、何て幸せな造りかと思ひながら、その先の野菜畑も目に入った。

和子さんは眠っている姿そのものだった。軽く結んだ唇は紅をさし、青い花模様の服で横になっている。亡くなつた人がこんなにも美しいのかと、彼女だからこそと眺めていた。遺影は昭さん七十歳のお祝いの時の写真からとのこと。

ご主人と奥さん(三女の方)、随分長いこと話した。私は玉里での昭さん、和子さんのこと、ご夫婦からは伊奈での明さん、和子さんの活動の様子が話された。和子さんの娘(長女・次女)さんも加わつて話しはつきなかつた。本当に会えてよかった。

帰り道は、黄金の波うつという表現の合う田をあちこちに見ながら改めて別れを感じながらだつ

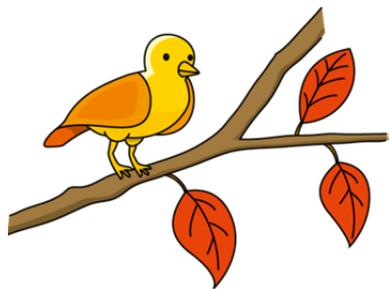
た。雑草の中に田がある玉里の風景とは違つて、美しい人の故郷に相応しい人々の生活が息づいているのを感じながら帰途についた。夕陽を眺め、星空を見詰めて和子さんとの別れが現実と覚悟した。

さあ、私も「玉里御留川」歩く会を、最後までひと頑張りしていこう。和子さんと縁ある人達とご供養、しのぶ会をもとう。

今回のことをお話しした時、ある見識のある方が、「惜しい人を亡くしたね。あの先生のことを考えたら記念碑でも建ててあげたいね。何とかしてあげて・・・」私も心の中では思つていたこと。何とかしてみよう。

和子先生から教えを頂いた人達、是非次の人たちに教えを伝えていってください。

(文中の歌は古歌、光明接取話讃より)



## 瓦塚窯遺跡

小林幸枝

石岡市八郷地区の瓦会近くにある「瓦塚窯遺跡」に行きたいと思つていましたが、いろいろ

用事もあり今までなかなかいけませんでしたが、しかし、先日ようやく立ち寄つて見学することが出来ました。

瓦塚窯遺跡は今から約1800年も前の奈良時代、天平13年(741)に、常陸国国府(現在の石岡市)に国分寺や国分尼寺等が建立された際に、その寺の屋根を葺く瓦類などを製造して窯跡です。

この窯跡は、かなり古い時代の窯跡ということ、昭和12年(1937)には、茨城県の史跡に指定されました。

なだらかな傾斜のある山すその斜面に、南北130m、東西80mの広い範囲に須恵器と呼ばれる硬質の土器を焼く窯跡が1基、瓦窯跡が34基、製鉄炉が1基あることが確認されました。

須恵器の窯は7世紀前半のものであり、瓦窯も「常陸国分寺」の創建よりも早い8世紀前半には操業が開始されており、「常陸国府」の建物や常陸国分寺よりも古い「茨城廃寺」の建物などにもすでに供給されていたと考えられています。遺跡からは、「常陸国分寺」が衰退する10世紀前半までは断続的に操業されていたものとみられています。また製鉄炉は8世紀半に、地下に穴を掘り、その上に炉壁を建てる半地下式の堅形炉と呼ばれるものといわれています。

大変貴重な発見とされており、平成29年には新たに国の指定史跡に登録されました。皆さんも一度足を運んで古代に思いを馳せてみてください。

## 新説 柏原池物語

兼平智恵子

石岡の台地を潤す三本の川、恋瀬川、園部川、山王川。その山王川の水源には龍神山周辺に降った雨水が細流となって池となった柏原池があります。

江戸時代の古絵図には農業用水のため池として描かれてあり、府中（石岡）の水田を満たし、まちを支えてきました。こうして古くから柏原池は背景の龍神山と共に石岡の人々の憩いの場として親しまれていました。

また池の東側には石製の弁財天社が鎮座しています。昔は祭りも行われていましたが、現在は廃止されているそうです。

昭和六十年には柏原池公園としてオープンし、平成元年三月には山口県宇部市常磐公園で飼育されていた黒鳥、白鳥を同市の好意により譲り受け、水鳥やオシドリ、アヒル等も住みつき、鳥たちのあどけない仕草に癒されます。

そして遊歩道に並行した芝生の中には、東京都新島本村から寄贈されたモヤイ像がウオーキングや散歩の皆さんをお迎えしてくれています。



しかし旧石岡では、たった一つの山であった現在の龍神山は採石で中央がえぐられ、悲しい残像の光景になってしまいました。

○ 分断された龍神山見守るモヤイ像 智恵子

これから紹介します柏原池に伝わる伝説「柏原池の若侍と美女の伝説」から、後半に紹介する新説 柏原池物語が生まれました。

### 柏原池の若侍と美女の伝説

平成八年三月発行「石岡の歴史と文化」より  
「府中大掾氏の時代、柏原池には絵にかいたような美しい女性が住んでいたという噂に若者達は一度逢ってみたいという好奇心で一杯であった。

ある夜、噂の美少女が姿を現し、音色の美しい笛の音と共に姿を見せた美男の若侍と寄り添い何を語り合うのか秋の夜は更け、池の水面は波一つないようであった。翌朝若侍は死体となって水面に浮かんでいたという。美少女は龍神山の大蛇の化身で、若侍はそれに魅せられて死んだのである。里人はこれを憐れんで、ねんごろに葬り、祠を建て冥福を祈ったという。」

常世の国の朗読物語

### 新説 柏原池物語

二〇一七年五月二〇日発行

著者 白井啓治

表紙絵 兼平智恵子

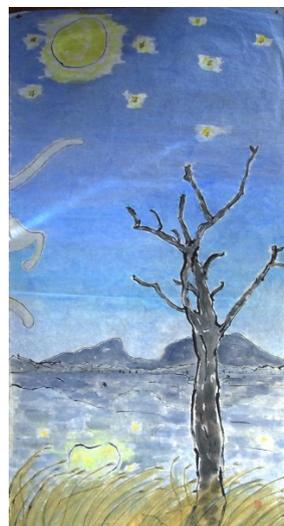
発行 ふるさと風の会

朗読Ⅱ白井啓治、朗読手話舞Ⅱ小林幸枝

『さて、これからお話してまいります物語は、

柏原池が灌漑用の池として、三方の谷津を堰きとめて作られてからおおよそ百年余りもたった頃の話である。その頃には、柏原池にも新しい自然が再生されて、鰻、鯉、鮒、小蝦、田螺などが繁殖し、漁で生計をたてる者も何人が現れていました。その漁師達の間には何時からか、満月の夜になると

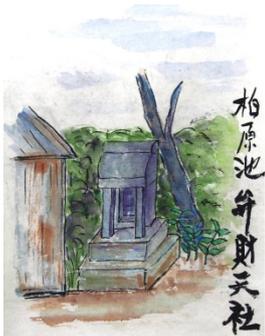
月明かりの中に絶世の美女が湖畔に姿をあらわす、と密かに言われておりました。その話を耳にした村一番の美男子といわれ、自分もそう自惚れていた一人の若者が、絶世の美女とやらに逢って、己が男ぶりで陥落させてやろうと毎晩柏原池にでかけてきて見張っていたのでした。



ある晩のこと、若者は毎晩の見張りにくたびれて、居眠りをはじめたところ、なにやら甘い匂いのすることに気付いき朦朧とする目をこすり、むりやり開けて見ると、目の前を薄絹に身を包んだ若い娘が優雅に過ぎるところでした……」

果たしてこれからどんな展開になるのでしょうか……。

気になるお方は、ふるさと風の文庫「新説 柏原池物語」是非ご覧下さい。



どうぞ春爛漫の桜花の時に、秋 鈴虫の唄う月夜の水面、柏原池にお出かけ下さい。くれぐれも美少女には目もくれずお気をつけください！

毎度コロナの話になって恐縮なのだけれど、ここにきて改めて気付いたことがあります。

政府主導のもと、在宅・ワークの増加などによって、都市部では間違いなく人出が減少したことは疑うべくもない事実です。

それに伴って車の往来も減り、大気の汚染が少なくなったのではないのでしょうか？

汚染物質による喘息などの呼吸器系の病気が減ったのではないのでしょうか。

在宅勤務が増えたことで、日ごろ家事には無関心だった男性が、料理や育児をするようになったのではありませんか？

そのせい、東京・河童橋の道具街では、調理器具の売り上げが上がったというはなしです。

毎日、長時間かけて通勤しなくても、仕事ができるということがこのことで証明されたようです。それに伴って、実質的な労働時間が減少し、いわゆる「労働生産性」も上がったと言えるのではないのでしょうか？

睡眠時間も増えて、今まで混雑する電車で立ちっぱなしだった身体も疲れが取れて健康度が増したのではなからうか。

深夜まで飲み歩くこともできなくなって、財布と肝臓への負担も軽くなったのでは？

これらによって、慢性疾患の患者が減り、医療機関への負担が減り、ひいては慢性的赤字が伝えられる健康保険制度の財務内容も改善に向かうのではないですか？

飲酒運転による事故もがた減りしたのではないですか？

新型コロナウイルスも、この日本に於いては意外なほどの（経済効果）を上げたのかもしれない。

どなたかこれらについて、検証していただけませんか。

マクロ的に見れば、プラス効果があったかもしれない（笑）

もちろんですが、コロナに罹患してしまった方々にとつては、笑いごとではないと思いますけれども。

私には、新型コロナウイルスの問題が、余りにも政治的課題と化してしまい、その本質が見えなくなってしまうたかのように思えてしょうがないのです。

〈選挙〉

この号が出来上がるころには、衆議院議員選挙も終わっていることでしょう。

（これを書いている時点で、衆議院は解散となりました。選挙期間も、なぜか史上最短です。コロナや経済対策を一日も早くするためと言っていますが、それならば、この間に国会を開き、議論して対策が出来たはず。選挙の結果はどうなることやら。正直なところ、まったく期待はしていません。）

数日前に見たテレビでは、北欧の子供たちの選挙に対するレポートが流れていました。

子どもたちは各政党の選挙事務所を訪れ、候補者に次々と質問をぶつけていた。その中には地方議員も、一国の大臣も、そしてそれらを支える多くの支持者たちもいました。

地球温暖化や、難民問題。腐敗汚職についても真剣に質問していました。

いずれの候補者も、相手を子供扱いせずに、真剣に答えていたのが好印象でした。

候補者たちは、より多くの子供たちを呼び込もうと、お菓子を配ったり、缶バッジを配ったりと、未来の有権者にサービスこれ勤めていました。

一方、かえりみてこの国の現状はどうでしょうか？

候補者が宣伝カーから降りて、子供の頭を撫でたりはしますが、子供の意見を本気で聴こうなんて候補者は一人も見ることがありません。そのくせ、子供の問題になると専門家面をしていらっしやる。

「高校生の政治活動はまかりならん」とか言いながら、いっぽうでは「18歳になったら投票に行きましょう、」なんて言っています。

先進国では、小さい子供のうちから選挙や議会の仕組みを長い時間をかけて教えています。

それが、ひいては民主主義を守っていくことだと、長い経験から学んだからに他ならないのです。

独裁国家というのならば、話は別だけれどもね。「受験勉強の妨げになるから」という声も耳にするけれども、他国の青少年と比較して、社会制度学習の時間を削ってまで勉強したはずの日本の青少年の学力が、思いのほか低いのは、いったいどうしてなのでしょう。不思議に思いませんか？

グレタ・トゥーンベリさんのような自分の意見をはっきりと言い、一人でも行動を起こすような若者が、この国ではなぜ出ては来ないのでしょうか。

ネットなどで若者の意見を見ていると、妙に分

かった大人のようなことを言っています。みんな又聞きの記事ばかりで、自分で考え付いたこととは思えません。

中には、明らかにフェイク・ニュースに踊らされている困ったケースも多々見られます。

国連の世界幸福度ランキング関連機関が2017年にまとめた報告書によると、幸福度の定義というものが六つあるとされていて、それは、

○社会的支援

○人生を選択する自由

○寛大さ

○腐敗と無縁の政府

○健康寿命

○一人当たり所得

だということ。いずれもどれもが納得できる項目ではないでしょうか。

これらの内容を、子供のうちから理解させることはとても大事なことだと思うのですがいかがですか。

この会報を、物心両面で支えて下さっている方がたくさんおられることには、毎回感謝しています。

わざわざお金を送って頂いたり、お忙しい中、会報の仕上げを手伝って頂いたり、風の会の文庫をお買い上げ戴いたり、文章を投稿して下さいありがとうございます。

わたしがつたない原稿を書く上での大きな励みになっていることは、風の会の一員として声を大にして言いたいことです。

## 風と共に 《理》

### 大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「言葉・続」

前月からの続きです。

言葉の重要性については、前月で述べさせていたいただきましたが、

今はネット社会、SNSや様々なサービスの中で、知りもしない全くの他人にも誹謗中傷の嵐、有りもしない事実を捏ね上げたり、根拠も何も無いのにも拘らず、それが真実かのように広がって行く。

根も歯もない事を、面白おかしく。

くだらない、もしも自分がターゲットとなったら、もしも自分の周りの親しい人がターゲットとなったら、その他大勢のあなた方は、一体どんな対応をするのか、どんな感情を抱くのか。

顔が見えないからこそ、本人だと認識してされないからこそ、本来あるべき姿で対応すべきだし、真摯に誠実に真剣に、必要ではないでしょうか。

負の連鎖が横行する世の中ですから、いつからこんな事になってしまったのか、皆自分が傷つかない1つの手段としても、自分の身を守る1つの手

段としても、他者を口撃する事が正しい事だと勘違いをしている。

自分よりも劣って見える第三者を、自分よりも幸福そうな第三者に対し、口撃する事に優越感・自己満足で幼稚な達成感を感じる、頭のおかしな人間が増えていく事実。

相対的に、この本質を失う正気の沙汰とは思えません。

個性、重要な事だと思いません。

ですが、物事には表裏があり、良い方向にとられる個性、悪い方向にとられる個性、

こんな事にも、自分を正当化させる為、陥れる為、とにかく保身の為なのか、いつの時代でも、権力・資本的優位者等によって、虐げられる事もままあります。

羨むなら、畏怖するなら、尊敬するなら、素直に認め言葉にすれば良い。

他者と自分を比べる事が、そもそも間違っていると言う事を、正しく理解せねばなりません。

こんな事が起きる度に、言葉によって嫌な思いをさせられるのです。

平等に、とても素晴らしい言葉です。

ですが、この世に誕生した瞬間から平等では無いのは周知の事実です。

当然誰もチャンスは与えられていません。その事に気付き、その階段を登るのも自分自身です。

自ら気がつく人もいれば、誰かから気付かされる人も、生涯その事に気が付かない人も、そこには平等にチャンスはあるのです。

言葉巧みに世を渡る、良いじゃないですか。立派な自信の生きる術の1つです。

何が起きるか分からないこの世に、自信を持って生きる武器を心を持っているのは、とてつもない強みの1つです。

人と違う事を恐れず、人と違う強みを自信に変えて、来るべき時まで静かに時を待つ。そんな事も、1つの生き方ですよね。

どこでどんな事が発生するか分からないのですから、沢山の強み・心の中に蓄えた自身の自信、揺らぐ事なくどんな言葉にも負けない様に、きっとあなたは輝けるはずですよ。

そして、誰かに優しく出来る余裕を持ったなら、日頃から余裕があるなら、人を成長させる、人の心を暖かく出来る様な言葉を、周りの人から掛けてあげて下さい。

全ての人が少しずつでも良い連鎖をうんでくれたなら、遠くない未来では、助けを必要とする人達も明るい日々となる事でしょう。

天災・厄災と嫌な時期ではありますが、いつも心に太陽を。

また次回お会いしましょう。

## 【風の談話室1】

やまご書房 (57)

やまご

日々陽の暮れるのが早まっている。同時に、日没位置が筑波山に近付いてきた。暑さ寒さも彼岸まで、この言葉のように、秋に向かいまっしぐら・・・!

・散歩中のほっとするひととき。牛さんや山羊さんに癒やされている日々です。今日も一日、よく動きまわりました。

・朝晩だいぶ寒くなってきた。お天気が続き冷たい風が吹いてくると、干し柿づくりの季節です。今年も沢山実りました。

・夫の日課、池に向かうと、猫も行動を共に、ゾロゾロと今日は六匹も集まってきた。網を引き上げると、あまえた声を発しご馳走にありつこうと必死です。今日は残念ながら成果はなかったようです・・・。

・十三塚の果樹農園に出かけた。太秋柿を求めて行ったが、まだ早かった。今が旬の柿を味見させてくれた、早秋や西村、麗玉(れいぎよく)等々聞いたことのない名前が・・・種類がいろいろです。麗玉は他の柿農園ではまだ作られていないそうです。形がよく切り口が黒っぽく、味も気に入り、名前も気に入ったので買って帰る。一番お馴染みの富有柿は二月末頃かなと言っていた。

・地元、林地区の梨農家さんから大きな梨の頂き

物。新高という種類らしい、甘くてシャキシャキ感あり、大変な大きさ。測ってみたら700グラムから1キロ近くもあった。もう一つの頂き物。ブドウ・・・巨峰とリザマートをかけ合わせの長野パール。こちらも1房1キロ近くあり、甘くて皮ごと食べるパリパリ感が何とも言えません。余りにも美味しかったので、お隣さんにもお裾分け。

・9月最後の日・・・迫りくる台風16号心配、たいした事がないといのですが。アケビの実が、もうすぐ口を開きます。ポポの実は食べ頃、いい香りがしています。アケビは散歩中上を見上げると結構見かけます。家の生け垣に蔓がからまり大変な思いをした事もあります。これからはカラスとの戦いになります

・近所の柿畑。まるで柿ツリー、50個までは数えられる目ですが目が見えなくて数えきれません。この木1本で何個ついているのか数えて見たいものです。この木は受粉樹です。

・暑くもなく寒くもない、過ごしやすいお天気、暫く20度近くの秋晴れが続くようです。今朝は友達夫妻が、我が家の渋柿狩りにやって来た。見上げるほどの大きな木から、高枝挟みで柿を落とさないように取るのも、中々大変なよう・・・。

しかしこの暖かい陽気だと、干し柿づくりにはむかない。ぐっと寒くなり晴天の続く頃が良いのですが、寒くなるまで待てません。熟してポタポタ落ちてしまうからです。年々熟し方が早くなっている様です。こんな暖かい陽気の中ですがどうか今年も干し柿上手出来ますように祈ります。

## 【風の談話室2】 《読者投稿》

### ガリ版があった頃

京都府木津川市 今井 直

思い切って断捨離できずに、つい抱え込んでいるものが数多くあります。先日、押し入れを片づけていたら、紙箱からガリ版刷りの小冊子がひょっこり出てきました。わら半紙に10頁ほどの袋とじで、ホッチキスの針はすっかり錆びついていました。学生時代の大学祭に関するもので、手書きの文字を見た途端に、こんなクセのある筆跡はあいつに違いないと親友の顔が思い浮かびました。ページをめくれば、昭和44年(1969)当時の懐かしい場面が次々と甦ってきます。高度経済成長期の真つ只中、何も怖いものがなかったあの頃、私は落語研究会(おちけん)で大いに青春を謳歌していたようです。先輩から着物の着付けや畳み方に始まり、作法や所作などを細かく教わり、後に先輩ができて私も気がつけば同じ事をしていました。最晩年の古今亭志ん生や桂文楽のナマの名人芸に接することができたのも大きな宝です。

高座名は三遊亭円生をもじって恋生(れんしょう)。「恋に生まれ恋に生きる男」と名のりながら、現実には女の子にちつともモテませんでした。大学祭では落研寄席が一番人気で三百人も入る大教室は常に超満員でした。さらに客席に入れない人々が階段下までずつと並びます。呼び込み係は客を逃がさぬよう、小嘶やギャグで笑わせるのが役目でした。「待ち時間はあと5分です。ゴフン、といえ

ば龍角散!!」また「お隣のお化け屋敷は余りの怖さに、おしっこをチビってしまうほど!幽霊やお化け役は皆ずつぶんハメイクです」お笑いよりも怖いもの見たさで、客はみんなお化け屋敷へ……これは大失敗でした。ガリ版の小冊子はそんな落研寄席についての留意事項や出番表だったのです。当時、学校ではテスト用紙や学級新聞などは、すべてガリ版刷りでした。ガリ版は手間暇がかかります。ヤスリ盤に置いた原紙(stencil paper)に鉄筆で文字を刻むのですが、失敗すると面倒なことになります。小さなミスなら修正液で補修できますが限度があります。私は英文の場合、オリベッティ(Olivetti)社のタイプライターで直接、原紙に印字していました。書き上げるとシルクスクリーンにセットし、インクを付けたローラーで押し印刷します。インクの乾きが遅く指先だけでなく袖口を汚すこともありました。

そもそもガリ版はエジソンが発明した印刷機を参考に、明治中頃に堀井新治郎という近江商人が簡易印刷機を考案し、「謄写版」と名付けて売り出したところ大当たりしました。しかし、1980年代後半からワープロとコピー機が普及し、やがてガリ版は役目を終え、用紙もわら半紙から上質紙に取って代わりました。旧堀井家は東近江市に移管され、「ガリ版伝承館」(名神高速蒲生IC近く)として一般公開(土日のみ・入館無料)されています。

かつてオリベッティはタイプライターの代名詞的存在でした。1954年の東京五輪ではオリベッティ社がプレスセンターを運営していて、映画『東京オリンピック』(市川崑監督)にも、各国の記

者たちが全世界に打電するシーンがあります。画面には大きなOlivettiのロゴマーク!実は、途中から製作費がかさんで、撮影を続けられなくなつた時、援助を申し出たのがオリベッティ社でした。当時はアマチュア規定が厳しく、五輪関連事業が金銭を受け取ることはできないので、フィルムの現物支給でした。監督はそのお札にこのシーンを挿入したそうです。このタイアップが何ら違和感がないのは監督の職人技だと、映画雑誌『キネマ旬報』の元編集長から聞いたエピソードです。

長引くコロナ禍で気が滅入って悶々としている時、「オリンピック・マーチ」(古関裕而作曲)が無性に聴きたくなり、DVDで映画『東京オリンピック』を見ました。最初は入場行進だけのつもりが、マーチが鳴り響くと気分がスカッと……とうとう最後まで見てしまいました。(劇場版は途中で休憩を挟み2時間50分)映像も音楽も優れた作品は、時間を超越して輝いています。特に感銘するのは、エンディングのメッセージ――

夜 聖火は太陽へ帰った 人類は4年毎に  
夢を見る この創られた平和を夢で終わら  
せていいのであろうか

市川崑監督は平和を祈願すると共に、華やかな祭典の影に恐らく危惧の念を抱いていたのでしよう。今回はコロナ禍により、四年毎の筈が一年延期され、何より客席の歓声が響きませんでした。ガリ版があったあの頃は、まだ豊かな日々とは言えないながらも、日本中が活気に満ちあふれて、誰もがワクワクしている時代でした。コロナ禍終息の先にも、きっと明るい世界があるはず。

この石岡市の「非常事態」は9月末をもって、めでたく解除されました。

このまま収束に向かってくれることを期待はしますが。

新型コロナウイルスの対応で、市立図書館も、九月いっぱい休館となっていました。10月1日から再開しました。2日目に行ったのですが、土曜日ということもあってか、窓口は本の返却で珍しく混雑していました。

(休み明け以降はまた、元の閑散とした様子に戻りましたけれども。)

論理的に考えて、図書館で集団感染(コロナ・ウイルスによるクラスター)が起きる可能性は、極めて低いと考えられるのに、休館するのはよろしくないと思う。

そのせいで、新たに読書することが不可能になつてしまった私としては、今回の措置にはどうしても納得がいかないのです。過疎と言つてもよい平日の図書館の込み具合からいって、図書館を休館とすることは、新型コロナ・ウイルスの感染拡大に対して、何らの有効性もないと考えられるからです。

逆に、ウイルスの事とか、パンデミックの歴史などを書籍から学ぼうとする者にとっては有害なものではないですか？

テレビなどの映像媒体から大量に流される、ニュースなどの情報はかなりの部分に、誤ったものが多いことは、これまでたびたび例を挙げて繰

り返し指摘してきました。しかも、その誤りがのちに判明しても、発信した側はきちんと活字なりで謝罪してはいません。

「非常事態宣言」を出したりひっこめたり。その都度、その根拠(エビデンスとやらいつてますが)がコロコロ変わっているではないですか。そのために、人々の間に要らざる混乱を招き、公式発表する側の信頼を失墜させているということに気付かないのでしょうかね？

今回のおすすめの本は、

「地球を滅ぼす炭酸飲料」(ホープ・ヤーレン 築地書館 小坂恵理訳 2020・12・30 原題・The story of more... how we got to climate change and where to go from here

日本の題名は、かなり衝撃的な題名になっています。地球環境のことについて書かれたものです。気候変動に対して、私たちはどうすればいいのでしょうか?とでも訳せばいいのかな。

著者はアメリカの有名な地球生物学者で、タイム誌から、2016年世界で最も影響力のある100人の一人に選ばれています。また権威ある科学賞の一つ、フルブライト賞も三度受賞しています。

世界中の膨大なデータベースから、エネルギーや食糧問題、地球温暖化など、さまざまな今日的テーマを、子供時代のエピソードを交えながら、素人にもわかるように巧みに解説しています。

アメリカの輸出農産物の大半を占めるトウモロコシが、家畜飼料や合成甘味料として加工され、直接食料として供給される量の四分の一ほどにしかならぬことを指摘しています。

安価なコーンシロップとしてほとんどの炭酸飲料の甘味料として使われています。或いは、アルコールの原料となっています。

専門書というものはどうしても難しくなりがちで、一部の人を除いて、とっつきにくいものになるのは理解できます。

かといって、あまりに平明にし過ぎると、役に立たない解説書になってしまいかねません。

そのいい例が、円周率 $\pi$ を3.0と教えた事でした。3.14...と無限に続くこの数字をキリがいいからとばかりに3.0として小学生に教えたのです。

やがて、中学高校生になれば、円周率が3.0でないことは判ってきます。実際に使用する場合3.0では全く役に立ちません。

子供時代に、まともなことを教えられないという経験が、そののちホープ・ヤーレンのようなすぐれた学者たちを産むのです。

この本の中で残念なことは、これからの気候変動について、が語られています。今回ノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎さんの名前がどこにも出てこなかったことです。

大気中のCO<sub>2</sub>の量の増加が気候変動の根拠となる理論モデル数式を提唱したのは、真鍋先生が初です。

残念ながら日本では省みられることがなく、アメリカ政府の大気局の専門家にスカウトされてしまいました。日本では十分な研究環境がなかった

と、プリンストン大学での受賞パーティーではつきり語られています。

また、米国スリーマイルやロシアのチェルノブイリ原子力事故が語られています。フクシマについては語られていないことでしょうか。当然フクシマが出てこなければどう考えてもおかしい。或いはフクシマノ事故は問題にするほどの事ではないと考えたのでしょうか。そして、生物学者として、フクシマの原子炉から漏れだした放射性元素が、周辺の動植物に対してどのような影響を与えるのか、与えないのかについて言及してほしかった。

電力需要に対する自然エネルギー（太陽光・風力発電など）の割合が（よほどの大発明でもない限り）このうちも数パーセントにしかない、と述べていますがこれはデータ解釈の誤りだと思います。

遅ればせながら、政府も先ごろ2030年までの目標として、自然由来の電源約40%・火力約40%・原子力20%に引き揚げました。相も変わらず原子力エネルギーに頼らなければ安定した電源が得られないなどと言っています。

ランニングコストが、ほかの電源に比べ莫大にかかることをひた隠しにしています。使用済み核燃料はどうするのか。いまだにフクシマの地下汚染水の対策すらできてはいない。結局、海洋放出を決めた。それが問題ないというならなぜ始めからそうしなかったのか。莫大な経費を投入したあげく、何にも出来なかったという無様な結果に終わっている。

使用済み核燃料や運転段階でどうしても発生する汚染された衣服などの処理はどうするのか。最

終的な解決手段が全く確立されていない。先送りすればするほど、巨額な処理費用が積みあがっていく。いずれ発生する原子炉の解体費用。それらを合算すれば、天文学的費用が掛かるのは子供でも判ること。

結局、電気料金に跳ね返ってきます。それでも間に合わずに、とどのつまりは税金を投入することになります。

ソーラー・パネルを例にとると、建物に直接電力を供給すれば、送電ロスが圧倒的に少なくなり

ます。

一方で大規模な発電所から送られる電力は、長い送電経路によって膨大なロスが生じています。

（このことは、以前も申しあげました）

発電量だけの比較をするなら、当たり前のことですが、単純に大規模発電所の方が大きいでしょう。しかし大掛かりな送電網や変電設備、発電所の建設費用など、またこれらのメンテナンス費用を考えたら、コスト的にどちらが安上がりでしょうか。

訳文の問題点も何カ所か目につきました。

この本を紹介するにあたって、いく冊かの地球環境問題を論じた本をばらばらとめくってみましたが、中にはこれはひどいな、というものもありました。

最近多発している異常気象を、真つ向から否定している内容のものです。2008年ごろに書かれたものでは、グリーンランドの氷がかえって増えているとか、70年代は寒冷化が声高に言われていたじゃないかとかね。

確かに、1000年を超えるロングスパンで考

えると、このところの異常高温とか、海面上昇は一時的であると言えるのかもしれない。極端に言えば、今は「第四間氷期」であると言えるのかもしれない。いずれ遠い将来、氷河期がおとずれるのかもしれない。かつて、それによって恐竜が絶滅したように。

アメリカの映画は、しばらく前にはやたらと地球が寒冷化する筋書きのものが多かったのがね。

政治的立場を超えて、中立公平な意見とおっしゃりながらそこで語っていることは、アル・ゴアの「不都合な真実」を俎上に挙げて攻撃しているだけです。

困ったことに、大手の出版社から出ている本なので、そのマイナスの影響力は大きいと思われる。

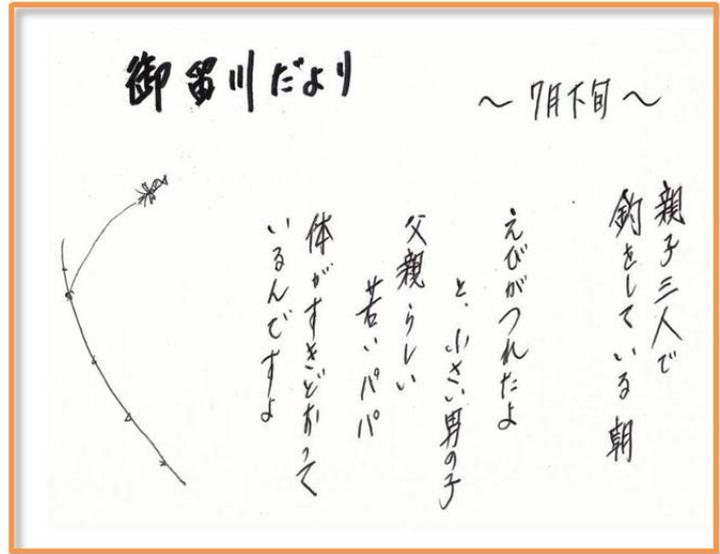
しかしながら、最近の地球規模の気候の異常さは、明らかに温暖化が進行していると思えません。

もしも違うというのであれば、ちゃんとした理論的に納得できる根拠をきちんと示すべきです。

更に困ったことには、こうしたことを書いている人たちの中には大学教授などが数多くいらつしやうって、この先生方はそもそも大学で学生たちに何を教えているのかな？と疑問に思わざるを得ませんね。

とはいえ、CO<sub>2</sub>（二酸化炭素）が気候変動にどう影響するかは、諸説あつて、まだ最終的な結論は出ていないものようです。

【御留川（おとめがわ） 便り】 伊東弓子



茨城県の難読地名とその由来 (18)

木村進

南指原【なじわら】 笠間市

「南指原」【なじわら】は大字地名ではなく小字地名だろう。

人の名前で「指原（さしはら）」という名前があるが、この名前の方は大分県大分市丹川（あかがわ）地区にほとんど限定された名前だそうで、「指原」

いが、これは地名に多く登場する「丹生（にう）」などが赤色の鉱物が採れる場所をさしているのだから「あか」になったものだろう。

「さしはら」という名前が「指原」「佐志原」と違った漢字で書かれるということはあまり漢字そのものには意味はなさそうだ。「南指原」を「なじわら」と読ませるのは「みなみさしはら」が「なじわら」となったと解釈するのが普通だろう。やはり「指原」（さしはら）の南に位置するのだとすると、北側に「指原」（さしはら）地名があるかというところではみつからない。

「さし」を調べると、古代朝鮮語で「城」を意味することばであったり、また「焼畑」「開墾するために原野を焼畑すること」などを意味しているという。

「武蔵ムサシ」の語源について色々の説があるが、柳田國男は「雑木林を蒸（ム）して焼畑農地（サシ）を作るに由来している」としている。またム産むで、佐志（焼畑）で開墾することを意味しているとしています。

また、サーシ（日向地、傾斜地）より出た地形語とみることもできそうだ。

これだと南指原は南向きの日当たりのよい傾斜地となり、現在の地形に近い。

また、茨城県のこの地方に集中する「佐志能神社」などの名前にもどこか共通する。

「佐志能」|| さしの、さしのうも由来はどこかで共通するのかもしれないが、大和朝廷の東国進出時に豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）が東山道から北へ進出して、その子孫や部下たちが各地でその地の開拓に努めます。その中に「佐白公」という名前が出てくる。

これが、佐白山やそこに祀られた神社「佐志能」になったりしていると思われる。

サシ|| 指|| 佐志 を焼畑で荒地を開拓したという意味だと解釈して各地の地名を見てみるとかなり納得できるところも多いように思われます。

地図を見ると、南指原は棚田が広がり、「ホタルの里」としても知られる里山です。直ぐ西に吾国山がそびえ、北は低い山ですが「三峰山」などの古くからの信仰の山もある。

★佐志の付く地名

- ・埼玉県狭山市加佐志（かざし）
- ・佐賀県唐津市佐志（さし）
- ・長崎県平戸市大佐志町（さしちよう）
- ・長崎県対馬市豊玉町佐志賀（さしか）
- ・大分県臼杵市佐志生（さしう）

★指|| サシ、サジの地名

- ・宮城県牡鹿郡女川町指ヶ浜（さしのはま）
- ・茨城県石岡市金指（かなさし）
- ・茨城県北茨城市中郷町小野矢指（おのやさし）
- ・茨城県猿島郡五霞町小手指（こてさし）
- ・埼玉県さいたま市西区指扇（さしおおぎ）
- ・埼玉県さいたま市西区指扇領辻（さしおおぎりょうつじ）
- ・指扇領別所（さしおおぎりょうべつしよ）
- ・埼玉県所沢市小手指台（こてさしだい）
- ・埼玉県所沢市小手指町（こてさしちよう）
- ・埼玉県所沢市小手指南（こてさしみなみ）
- ・埼玉県所沢市小手指元町（こてさしもとまち）
- ・神奈川県横浜市旭区矢指町（やさしちよう）
- ・新潟県見附市指出町（さしでまち）
- ・新潟県村上市指合（さしあわせ）
- ・新潟県糸魚川市指塩（さししお）

- ・石川県小松市江指町（えさしまち）
  - ・石川県かほく市指江（さしえ）
  - ・静岡県浜松市北区引佐町金指（かなさし）
  - ・静岡県島田市旗指（はっさし）
  - ・京都府京都市中京区指物町（さしものちよう）
  - ・京都府京都市中京区指物屋町（さしものやちよう）
  - ・京都府京都市伏見区指物町（さしものちよう）
  - ・兵庫県美方郡新温泉町指杭（さしくい）
  - ・奈良県天理市指柳町（さしやなぎちよう）
  - ・岡山県美作市日指（ひさし）
  - ・長崎県佐世保市指方町（さしかたちよう）
  - ・長崎県雲仙市小浜町北木指（きたきさき）
  - ・長崎県雲仙市小浜町南木指（みなみさき）
  - ・大分県中津市餌指町（えさしまち）
  - ・大分県杵築市山香町日指（ひさし）
- このように「指物（さしもの）…くぎを使わずに木を組み合わせてつくった道具箱など」「指物職人」に由来したと思われる地名も多いが、結構由来が気になる名前も多い。
- あと、福島県会津若松市に「神指城（こうざしじよう）」というお城がある。

## 蜆塚 【しいづか】 ひたちなか市

ひたちなか市三反田蜆塚貝塚（みたんだしいづか かいづか）として知られる地名です。「蜆」＝「シジミ」ですから、普通に読めば、「蜆塚＝しじみつか、しじみづか」になる。

静岡県浜松市に縄文時代の貝塚として知られる「蜆塚遺跡（しじみつかかいづか）」があり、貝殻の9割以上がヤマトシジミの貝殻で、この蜆塚となったのです。また人骨や獣の骨なども出てきま

した。

こちらのひたちなか市の蜆塚＝しいづか についても、ヤマトシジミの貝殻がたくさん出土しました。またイノシシ・シカ・クジラ・イヌ・カワウソなどの骨もでてきました。

また最大の特徴としては、縄文後期のハート形土偶が出土したことでしょう。

ハート形と呼ばれるのは、土偶の顔がハート形をしているためで、関東地方から東北にかけて出土しています。顔がハート形をしているのみではなく、ほぼ女性像で、乳房や産道などが表現されていたり、妊婦を現したりもしています。

この貝塚から出土したこの土偶は10～20cm程の大きさの像で、頭の脇のほうに孔があいていて、ここに紐のようなものを通して吊るしたりしたものと考えられています。かなり貴重なものですね。場所は那珂川の下流の北側で、ひたちなか海浜鉄道湊線の「金上駅」と「中根駅」の辺り一帯です。少し上流に武田氏館があります。甲斐武田氏の名前の由来との見方が強い場所です。

★蜆＝シジミ の付く地名

・静岡県浜松市中区蜆塚（しじみづか）

・愛知県弥富市西蜆（にしじみ）

・愛知県弥富市東蜆（ひがししじみ）

★蛤＝ハマグリ の付く地名

・宮城県石巻市蛤浜（はまぐりはま）

・愛媛県宇和島市蛤（はまぐり）

・佐賀県伊万里市波多津町馬蛤潟（まてがた）

・長崎県西海市大島町蛤（はまぐり）

★蠣＝カキ の付く地名

・三重県桑名市蠣塚新田（かきづかしんでん）

・長崎県西海市崎戸町蠣浦郷（かきのうらこう）

★貝の付く地名（茨城県のみ）

・茨城県古河市谷貝（やがい）

・茨城県石岡市貝地（かいじ）

・茨城県龍ヶ崎市貝塚町（かいほらつかまち）

・茨城県取手市貝塚（かいづか）

・茨城県筑西市西谷貝（にしやがい）

・茨城県桜川市真壁町上谷貝（かみやがい）

・茨城県桜川市真壁町下谷貝（しもやがい）

・茨城県桜川市真壁町東矢貝（ひがしやがい）

・茨城県行方市井貝（いがい）

・茨城県結城郡八千代町貝谷（かいや）

全国に「貝」の付く地名はたくさんあります。ただ、この貝は貝殻の貝ではないと思われる地名がかなり多くみられます。

「小貝川」は「蚕飼川」だと一般には言われていますし、石岡の「貝地（かいじ）」は「麻地」と書かれていたそうです。「麻（かい）」という字は「公麻（くがい）（くげ）」などとして使われますが、役所、官庁などを指す言葉で、辞書によると、「本来は官衙の舎屋の意味であったが、律令制下においては官衙の収蔵物・用度物のことを指すようになり、更に転じて官人（特に国司）の得分（給与）を指すようになった。」とあります。

また桜川市真壁の谷貝地名についても、古代の真壁郡に谷貝郷が存在し、地形も台地と平地が入り込む谷戸が多い地形です。貝は崖地を意味しているのかもしれない。

## 鹿窪

【かなくぼ】

結城市

鹿の字を「か」と読むことは「鹿島」などでよく

使われますが、「かな」または「かね」などと読ませる地名がかなりあります。

「鹿」には「金」かね、かな、「鉄」かな、かねなどと同じような意味合いがあるのではないかと指摘されています。古代の製鉄跡（タタラ製鉄）などと関係がありそうです。

タタラ製鉄は砂鉄を使って鉄をつくる製法です。また「窪」や「久保」などという地名も単に窪地という意味合いもありますが、砂鉄の製鉄跡などにもよくつけられています。

この結城市の「鹿窪（かなくぼ）」について、角川日本地名大辞典には、「下総台地北西部、鬼怒川と田川の合流点右岸に位置する。縄文早期の向原遺跡、鹿窪古墳群がある。慶長8年（1603年）の覚書書に「結城かのくぼ」と見える。」とあります。

また、平凡社の茨城県の地名の方が少し詳しく、1596年の文書に「結城領鹿窪村内」との文字があるとも書かれており、かなり古くからの遺跡がある場所で、古くから人が生活していたと思われるます。

石岡市に「鹿の子」（かのこ）という地名がありますが、ここから、常磐高速道路建設時に地下から奈良時代から平安時代初期の大規模な遺跡が発掘されました。

奥州の蝦夷征伐のための武器製造していた工場跡、製鉄所跡ともみられています。

鹿の子＝金（鉄）の子 との解釈が強い地名です。

★鹿をカナと読む地名

- ・茨城県結城市鹿窪（かなくぼ）
- ・埼玉県さいたま市岩槻区鹿室（かなむろ）
- ・福井県福井市鹿俣町（かなまたちよう）

・熊本県人吉市鹿目町（かなめまち）

★鹿の子地名

- ・宮城県気仙沼市本吉町鹿の子（かのこ）
- ・茨城県石岡市鹿の子（かのこ）
- ・兵庫県神戸市北区鹿の子台（かのこだい）

★カナクボ地名

- ・茨城県結城市鹿窪（かなくぼ）
- ・埼玉県児玉郡上里町金久保（かなくぼ）

### 常陸旧地考（17）

下巻（十）

菊地孝夫

○大生里

風土記行方郡の条に、したがってこれ以南相鹿大生里、古老曰く倭武天皇相鹿丘前宮に在りしとき膳炊く屋立浦浜に構え、船を編み橋を作り御在所を通る。大炊の義を取りて名を大生之村とあり、大加村というも並びたれば次の相鹿にて大生村これ成ること疑いなし。

○相鹿 アフカ

大生村に並びて大加村在り、これ相と大と音の近きよって書き換えたるものにて相鹿なり。和名鈔に行方郡に大生郷相鹿郷並べ載せたり。

○安是湖

風土記鹿島郡の条に、東に大海・南に下総・常陸堺、安是湖、西に流海。北に那賀・鹿嶋堺阿太加奈湖云々とあり。この湖今ある所を知らず。

○阿太加奈湖  
上に同じ、今ある所を知らず。

\*おそらくは今の涸沼か

○高松濱

風土記鹿島郡の条に郡の東二三里に高松濱。大海の流れ著しく、砂貝積り高丘をなす。松林自生椎、柴交雜して既に山の如し云々と有り、また若松の浜の鐵を取り、以て鋤を造り云々。その若松浦即ち常陸下総二国の堺、安是湖のところなり云々とみゆ。高松濱、若松浦同じ地なるべし。今ある所を知らず。

○軽野里

万葉集九卷に鹿島郡苅野橋に大伴卿別歌とてことひ牛の三宅の瀉に指し向う

鹿島の崎に狭丹塗の小舩をもうけて云々海上の其の津に指して君が漕ぎいなばと有り。

名寄に古来吾合  
月影は澄み渡るらむ鹿島なる

なお郷の条に見ゆ かるのの橋の秋の潮風

ことひ牛・牝牛の事。\*子問い牛か？。

○童子女松原 オトメノマツバラ

風土記鹿島郡の条に、これより南、童子女松原いにしえ、年少童子在り云々とあり、この地今ある所を知らず。

○角折濱

風土記鹿島郡の条に、以南平原有角折濱という。いにしえ大蛇あり、東海に通らんと欲し、濱を掘る。穴を作り、蛇の角折を落したりにより名づく。

或いは曰く、倭武天皇この濱に宿り、御膳さし奉りし時、すべて水無く即ち鹿角執り、地掘ればその折れなしたる所を以てこの名とする云々とみゆ。いま東海につきて角折濱あり、これ成ること疑いなし。

さてまた、鹿島大官司家の事を記したる文、正草子という俗書に常陸國角岡磯というのはこの角折濱の事なるべし。

#### ○平津驛家

風土記那珂郡の条に平津驛家、西二里岡有、大櫛という、上古人有り云々。その食するところ貝積つて岡をなす。時の人不朽の義でいま大櫛の丘という云々あり。不朽は大朽の誤りなるべし。この地、今ある地を知らず。ある人の説に平戸村近く大串村在り、これ平戸は平津なるべし、大串は大櫛なるべしといえり。この平戸大串の二村、茨城郡につきて、那珂郡近くに猶在り、これならんか。

#### ○大櫛岡

上に言えるごとく今の大串成るべし。

#### ○輔時臥之山 (ほときねのやま)

風土記那珂郡茨城の里の条に、これより以北高丘有り、輔時臥之山という云々あり。今ある地を知らず。

さてこの茨城の里のことは茨城郡茨城郷の条に、

また村上神社の条に言える如く、茨城郡の茨城郷の故事を、那珂郡茨城の里の条に伝えたるにて、全く茨城郡の茨城郷の故事にて、今の府中の里のことにて、村上の神社の故事なり。これによればこの輔時臥之山は今の村上の御龍山なるべし。

輔時臥之山…くれふしのやま、とも。輔時は、申の刻。\*つまり、早寝をしたのか

\*炭焼きと関連し、ひいては製鉄とも関連があるか。

御龍山…現在の龍神山か？

#### ○粟河

風土記那珂郡の条に、郡より東北粟河を挟みて駅家を置く、元は粟河に近く、河内駅家という。今元の名に従う云々あり。今詳らかに知り難し。今、那珂川にそえて上河内村、中河内村在り、このうちいづれならん。

日本後記に弘仁二年(811)常陸国河内驛を廢す云々。

兵部式に常陸國驛馬河内二疋云々など見えたり。

#### ○谷會山 タニアヒ

風土記久慈郡の条に輕麻呂、堤を作り池と為す。北を谷會山という云々あり。今ある地を知らず。

#### ○玉川

風土記久慈郡の条に、郡西十里、静織里云々、北に小川有。丹石交錯、色は編碧、火鑽に似て尤も良く、以て玉川の名となす。今ある地を知らず。

丹石…瑪瑙のことか

瓔碧…不明。\*赤青入雜じった石と見るか？  
火鑽…火うちいし

#### ○小田里

風土記久慈郡の条に、郡北二里に小田里。多く墾田となす。それをもって処の名と為す。清き河原あり、北山より発し郡家近くを経て、南久慈の河に会し、多く年魚を取る云々とあり。

日本後記に、弘仁三年十月癸丑(812)小田驛を建てると見えたり。今ある地を知らず。

\*山田里の誤り。

#### ○いさが崎

元眞家集に

常陸なるいさが崎の忘れ貝

秋寢覚に常陸とす。拾うかい無きものにもありぬ

秋寢覚に常陸とす。今ある地を知らず。

#### ○いさかの川

夫木抄に

せきとむる人もなき世にあやくて

秋寢覚に常陸とす。いさかの川の行くもやられぬ

#### ○もろは山

夫木抄に

葵草諸葉の山のとどぎす

秋寢覚に常陸とす。また一本には末勘の部に入

れたり

○筑麻川  
夫木抄に

つくま川入り江におしのさばかぬは

葦の裏葉に氷しぬらし

秋寢覚に常陸とす、また筑波川を並べ載せたり。  
つくまとつくばと通音なれば、筑麻川も筑波川  
なるを、誤りつて並べ載せたるのでは。

夫木抄・秋寢覚…歌集

○葉山里

夫木抄に

筑波山はやまの里に立つ烟

霞もしげし雲の夕暮れ

秋寢覚には常陸としてある。

○白雲山

名寄に常陸とす。

筑波峰の白雲山のたかくに

わがすべらきをあふくなりけり

今ある所を知らず。

○阿自久麻山

名寄に常陸とす。

万葉に、

あともへり あしくま山のゆつる葉の

深まるるときに風吹かずかも

新六

ゆつるのは とき葉の色もうづもれぬ

あじくま山に雪の降れらば

とあり、今ある所を知らず。

万葉集十四巻に國知らずの部に載せたり。

新六…不明。歌集か

○黒前山 くらさき

國誌に、黒前山、一名角枯山（つのかれやま）  
多可郡にあり、今ある所を知らず。

風土記に、黒坂の命陸奥國蝦夷を撃つ時、凱旋  
多可郡に至り角枯山で病死、ゆえに角枯改め黒前  
山と号す。黒坂の命の輸需車、黒前山より発し日  
高見國に至る云々とみえたり。

○鳥子山

國誌に、鳥子山（とりのこやま）あり。那珂郡  
鳥子村の西、那須郡界那珂川の東にあり。山上神  
祠あり。土地の人相伝、山神雉子を好む。ゆえに  
雉子権現と名づく。  
（権現は浮屠氏の名なり古かかろ号なし）

浮屠氏…浮屠は仏陀の事。菩薩など。また僧侶  
を指す  
（続く）



石岡地方のよもやま話

木村 進

### (3) 石岡と徳富蘇峰

石岡駅も橋上駅となりすっかり様変わりしたが、  
駅の改札の上には昔からあった「驛岡石」とかか  
れた古めかしい扁額が掲げられている。  
以前の駅にも改札のすぐ上に置かれていたが、黒  
っぽくて目立たないのであまり印象には残ってい  
ない。

この扁額を新駅舎でも残してほしいとの要望も結  
構あったようだ。



この扁額は「徳富蘇峰」の書から起こされたもの  
である。

今度の新駅にはこの額の説明がかかれたプレート  
が改札口通路の壁に架けられている。内容は、

「石岡駅改札上部にある木製の駅名標は、駅舎橋上化工事に合わせて、旧駅舎より移設した。これは、徳富蘇峰が書したものを彫刻したものである。」

1951年（昭和26年）、当時の石岡駅長（笹谷和三郎）や石岡市の窪田婦久の要望により、蘇峰が89歳の時に書した。

彫刻は、蘇峰の秘書、塩崎彦市が行った。当時、駅長から蘇峰に送った手紙が、神奈川県にある徳富蘇峰記念館で確認できる。

徳富蘇峰は、1863年3月熊本県に生まれ、ジャーナリスト、歴史家、評論家、政治家として活躍し、1957年11月に94歳でその生涯を閉じた。

なお、茨城県内に蘇峰が書した駅名標は、水郡線常陸太田駅にも掲示されている。

これは1948年（昭和23年）、蘇峰が85歳の時に書したものである。

この時の常陸太田駅長も笹谷和三郎であり、駅長の要望から当時の衆議院議員山崎猛の尽力により実現した。

原書は、常陸太田市郷土資料館に保存されている」とある。

徳富蘇峰は、徳富蘆花の兄で当時のジャーナリストとしてはかなりの重鎮で影響力もあった。

その蘇峰の書いた駅名扁額が茨城県に2箇所あるという。石岡駅と常陸太田駅だ。

この両駅の駅長をしていた「笹谷和三郎」氏が蘇峰にたのんで実現したらしい。常陸太田駅の駅名看板は次だ。



さて、どちらかというところらのほうが近代的で、石岡駅の方が古臭い。

でもこれが書かれたのは、石岡駅が昭和26年で、常陸太田駅が昭和23年だという。

笹谷和三郎氏は常陸太田の駅長から石岡駅長に移ってきたという。

常陸太田駅は左から右に書かれ、石岡の方が逆向きの右から左になっている。

どうして漢字の横書きの文字方向が違うのでしょうか。

現在は皆左から右に書いているので、右から左は古い時代の表示だと思ってしまうが、どうも少し違うようだ。

調べてみると、そもそも日本語は縦書きと決まっていたのを横書きが始まった時にはどうも方向は決まっていなかった。

鉄道関係でも、切符が左から右、出札口の表示が右から左、寝台車などの表記は左から右、汽車の行先表示は右から左などとかかなりバラバラだったという。

1942年（昭和17年）に文部省通達では今と同じ左から右に書くように指導があったというが、当時は戦争がはじまり、敵国のアメリカやイギリスの表示を使うことを避けるため逆に右から左の逆向きの書き方が広がったという。

戦後すぐの頃はまだ混乱しており、新聞が現在の左から右にかくようになったのは読売新聞社の「読売報知」が終戦後の1946年（昭和21年）1月1日から現在の様式に完全統一したのが最初でした。

でも古いほうがよいというような風潮もありましたので、石岡駅は戦時に書かれていた右から左の漢字横書きとなったのでしよう。



## 【特別企画】

### 打田昇三の太平記（15） 巻第七・2

#### ○新田義貞に諭旨を賜う（たまう）事

其の頃、上野国（群馬県）に新田小太郎義貞という武士が居り八幡太郎義家から十七代の後胤と称していた。清和源氏系の名族も平氏系北条氏の時代には幕府の命令に従う他はない。遙々出陣して金剛山攻めの搦め手に属していたのだが、どうも幕府軍の景気が良くない。そこで義貞は重臣の船田入道義昌を密かに呼んで、相談したと言うか次のような無理な命令をしたのである。

「…源・平両家は昔から朝廷に仕えて相互に牽制をして来た。此の義貞は不肖ながらも源氏系新田家の当主として武門の誇りを持つていて、ところが今の幕府は執権・相模入道が力を失い、世情騒然として北条氏滅亡も遠くは無いと思われる。其処で我々は本国に戻り、幕府打倒の兵を挙げ朝廷に味方をして天皇の憂いを除こうと思う…その為には天皇の命令は無理でも大塔宮の令旨ぐらいは欲しいのだが…聞くとところによれば此の辺りには大塔宮が潜伏されているらしい。そこで船田入道は何とかして大塔宮に接触し令旨を賜わって来るよう事は出来ないであろうか…」

言うのは簡単だが実行は難しい問題を与えられた船田入道は「出来ません！」とも言えないので快く引き受け、自分の家臣から三十人を選んで野伏（住所不定の修行僧など）のように仕立て、夜中に葛城峰へ登らせてから自分らは落ち武者の格好で合戦の真似事をリアルに展開した。すると周辺に山々に潜伏していた本物の野伏たちが仲間と

思つて下りて来たので船田らは十一人を捕えてから縄を解き、事情を話して大塔宮の潜伏先から令旨（皇族の出す命令書）を貰って来る様に命じた。野武士たちは喜んで十人を人質に残し、選ばれた一人が大塔宮の潜伏先へ報告に向かった。船田らが待つ中で一日経って戻った山伏は一通の文書を持参してきた。其れは「令旨」では無く「諭旨」として書かれたものであった。つまり、天皇が発する命令として側近の公卿が書いた文書で「…逆臣・北条高時一味を討て！」と言う朝廷の命令書である。当然ながら新田義貞は感激し、其の翌日に急病と称して幕府の戦線を離脱し本国・上野国へ避難したと言うか凱旋して来たのである。

此の事が他の幕府軍勢に知れたから「是は良い方法…」とばかり、あれこれと理由を付けて戦線を離脱する武士団が増えて来た。当然ながら攻撃軍は弱体化する。幕府は補強勢力として宇都宮軍を派遣し、其れに千余騎の関西軍を加え新たな戦闘力として城攻めを継続した。昼夜を問わず十日ほど攻撃して城の堀際に仕掛けられた障害物を除去したので城方も防御に支障が出始めた。

そこで攻撃軍は一気に城を落とそうとして戦闘に従事する者とは別に城の立つ山を掘り崩す作戦を実行した。其の作戦で大手の櫓を一つ倒したから早く掘れば良かったと後悔して、我も我もと作業に回る者が増えたけれども、場所が大きな山であるから十日や二十日の作業で城が落ちるほどの効果は無かったのである。

#### ○赤松、蜂起（ほうき）の事

「赤松」と言っても植木屋さんの話ではない。鎌倉初期に播磨国の守護になった村上源氏系武士

団のことであり、当時は鎌倉（北条氏）に従っていた。楠木正成の抵抗が強いので周辺の大名が救援に駆り出され、京都の護りが手薄になった為に幕府は赤松にも京都の守備を命じた。ところが赤松は自分の城（播磨・苔縄城）を出てから京都には行かず、山陽道と山陰道とを塞いで山里・梨原間に陣を布いた。神戸近郊だと思われる。

岡山・広島・山口などから幕府の命令で出掛けて来た武士団は都へ行け無くなる。近くの宿場に集まって抵抗勢力を追い払おうとしたのだが是が滅法に強くて二十人程が敵に捕らえられた。赤松は此の捕虜を親切に扱ったので、捕虜代表の伊東大和二郎らは考え方を変えて官軍側に付き、自分の城である三石に戻って挙兵した。是を備前国の守護職・加地源二郎左衛門が気にして攻めて来たけれども直ぐに負けてしまった。

その後は西国街道筋が戦乱に巻き込まれ、特に西の方から都へ向かう武士団は行く手を塞がれたから目的が果たせなくなる。少しずつ時代が変わってゆくのである。最初に幕府の命令に背いた赤松は周辺の小城を休み無く攻めて勢力を増し軍勢は七千騎以上になった。直ぐに都を攻めても良いのだが、一先ず人馬を休めることにして先ずは北方に在った山寺（廃寺）を居城に改修した。その為、都を目指す此の地方の幕府勢力は八十キロほど縮小させられたのである。

#### ○河野、謀叛（むほん）の事

赤松氏の事件で頭が痛い幕府は更に苦境に立たされることになる。六波羅（幕府機関）が期待していた宇都宮らの関東勢は楠木攻めの為に千早城へ向かったけれども、西国から来る筈の軍勢は伊

東の變心で進めない。四国勢を応援に向けようとした幕府の作戦は、伊豫国からの急報で挫折した。

「：地元武士団の土井二郎、得能彌三郎らが反幕府勢力として挙兵し土佐へ侵入したので、是を防ぐ為に幕府側武士団が二月十二日には長門から軍船三百余で出陣したが、合戦で見事に負け戦死者、負傷者は其の数を知らず（多数）：幕府指揮官も合戦で行方不明、是により四国の武士団は全てが反幕府勢力となった：」

是で愕然としたのだが、報告には続きがあつて「：其の後に四国勢は土井・得能に付いて六千騎ほどの勢力を維持して宇多津・今張の港に船を揃え（都へ）攻め上ろうとしている。御用心なされるように：」と記されていたけれども、遠く離れた四国勢の離反には幕府も対応できない。

### ○先帝、船上に臨幸の事

「先帝」とは後醍醐天皇の事であろう。此の人は反幕府運動で逃げ回っていたから皇位は北朝系（現在の天皇家系統）の光厳天皇に移つていたのである。天皇は万世一系などと言われるが実際は日本もアメリカ並みに南北の争いが有つた。

原本に戻ると、京都近辺が「幕府・反幕府」に分かれ騒然としていたから其れが地方にも影響し特に西国・四国などで混乱が激しくなつて来た。

其の原因を作つた後醍醐天皇には野心の有る者が近づこうとする。其れを心配した幕府は隠岐の島に拘束中の天皇周辺の警備を厳重にするよう指示を出した。警備は何組かの武士団が交代制で夜も昼も厳重に続けられており元弘二年二月下旬には佐々木富士名判官と言う武士が当番であつた。

此の者が、監禁されている天皇を目の前にして

「：此の方を看板にして謀反を起こしたら面白いのでは：」と冗談半分で思いついた。

そうは言つても、相手が囚人の天皇であるから相談も勧誘も出来ない。どうしようか悩んでいる時に、或る寒い夜に中門の警備に就いた。特に冷え込みの厳しい夜であつたが、天皇付きの女官が氣を利かして酒を届けてくれた。そこで女官に礼を言いながら次の様に話をした。それが天皇に伝わる事を見込んでのことである。

「：天皇は未だ御存じ無いと思うが、実は楠木兵衛正成と言う武士が金剛山に城を構え、反幕府勢力として立て籠りました。其処へ東国の幕府軍勢百万騎が押し寄せ、二月初めから攻めたけれども城の護りが固くて寄せ手が苦しみ、備前国では伊東が三石城に籠つて山陽道を塞ぎ、播磨では赤松入道が大塔宮の令旨（命令）を頂いて大阪近辺まで攻め上り兵庫に布陣しています。其の軍勢は二千騎ほどですが、今や京都の都を窺うほどの勢いです。四国でも河野一族、土居二郎、得能彌三郎らが天皇方として挙兵し、地元の幕府勢を駆逐し大船を揃えてお迎えに参る：との噂も有り、其の前に京都（幕府）を攻める筈です。

これらを考えると（天皇の）運が開ける時が来た様なので、私が当直勤務の時に此処を脱出されて千波湊から舟で出雲か伯耆か（山陰地方）に行かれ、地元の武士を頼つて暫くお待ちください。私は天皇を追跡する振りをして後を追います：」

女官から此の報告を聞いた天皇は、其の真偽を確かめる為に其の女官を佐々木に「下げ、佐々木は歓喜して忠誠を誓つた。女官にとつては薄情な天皇に仕えるより良かったかも：」

やがて佐々木は天皇方に付く武士を探しに出雲

国へ行き其の地を支配する塩谷判官を誘つたのだ

が判官に拘束されてしまった。天皇のほうでは佐々木からの連絡が途絶えたので、自ら脱出することにして機会を待った。或る夜に天皇の子を宿した三位局が出産の為に仮御所を出るので天皇は産婦の輿の付き人として役人の目を誤魔化し脱走に成功した。供は六条少将忠頼だけである。

外に出てはみたが行く当ても無く三月の夜は未だ寒い。追つ手の来ないうちに港へ行きたいのだが道が分からない。お供が一軒の家の門を叩き千波湊への道聞いた。出て来た男は裸足の天皇を見て何となく氣の毒に思い、軽々と背負つて湊まで連れて行つてくれた。更に伯耆国（鳥取）へ行く：というので停泊中の船を聞き回り、乗船許可を取つてくれたのである。後に天皇が此の青年を探したけれども該当事者が居なかつたと言う。

天皇を乗せた船は夜明けに出港し順風に帆を揚げて本土を目指した。こうして隠岐の島から脱出出来たのであるが、日が昇り天皇の顔が分かる船頭が只人では無いと気付いたので忠頼は事情を打ち明け然るべき港まで送る様に頼んだ。船頭は感激して希望の場所迄送る事を約束してくれた。

ところが、海上数十里を進んだ頃に隠岐島の役人たちが十艘程の船で追跡して来るのが見えた。船頭は慌てず、天皇らを船底に案内して周囲に積み荷の干し魚入り俵を置き重ね、其の上に船員が立ち並んで櫓を漕ぐようにしたから、追つて来た役人たちも見付けることは出来ない。役人が「途中で怪しい船を見かけなかったか？」と訊ねたので船頭は「：そう言えば昨夜、千波湊で出会つた船が京風の冠を被つた人と烏帽子の人とを乗せて居たようです。もう既に五・六里は先に言つた

しよう：」と答えた。役人たちは其れを聞いて、慌てて離れて行つた。一安心したのだが、今度は一里程進んだところで百余艘の軍船が追い掛けてくるのが見えた。船頭は帆と共に櫂を使い逃れようとしたのだが風向きと潮流とが合わず、敵の船団が近付いて来る。万時窮すと思つた時に天皇が身に着けていたお護りを分解して海に浮かべた。

すると龍神が気の毒に思つてくれたのか、海風が変わり、天皇の船は東へ送り、追つ手の船は西へ吹き戻してくれたのである。こうして難を逃れた天皇らの船は伯耆の国（鳥取県西部）名和の湊に着く事が出来た。そこで六条忠顕が先ず船を下りて地元の人に「此の辺りで名のある武将は如何なる人であるか？」と訊ねた。聞かれた者は「有名では無いが、名和又太郎長年と申す者が家富み一族が多く、心が廣いと言われております」と答えた。忠顕は何人かの人に噂を聞き、やがて天皇の勅使をもつて名和家に申し入れた。

「…実は隠岐の島に幽閉されていた天皇が今、此の港に来て居られる。名和殿の武勇を聞かれ、是非とも頼りにされる由、仰せられた。是を受けられるか否か、速やかに返答されるように…」

折から、当主の名和又太郎は一族を集めて酒宴を開いていたので、急に「天皇が…」と言われても返事に困る、どうしようか迷つていた。すると弟の小太郎長重が「…昔から今に至るまで、人が望むのは名・利の二つである。今、此処で畏くも十善の君（君子）天皇に侍（たの）まれ決起して屍（かばね）遺体）を軍門に晒すとも、名を後代に残すことは何よりの名譽であろう。直ちに御決心下さい！」と主張し、その場に居た一族の二十余人が賛成したので当主・又太郎も同意した。

そうなる幕府の追つ手が来ることを考えねばならない。其処で先ず長重が天皇を迎えに行き直ちに船上山に隠すこと、他の者は籠城・合戦の準備をすることに決まり準備が進められた。然し急場の事なので天皇を乗せる輿などは無い。長重は鎧の上に菰を巻いて天皇を背負い、飛ぶ様にして船上山に連れて行つた。其れから家臣が総動員で籠城の準備を始めたのだが、先ずは食糧である。

長年は近辺に「…事情が有つて船上山に籠ることになり食糧を求めている。米一荷を持参すれば錢五百を与える！」と触れを回した。条件が悪く無かつたので四方八方から農民数千人が是に依りて五千石ほどの米が集まつた。長年は家財全部を近辺の農民に分け与え、館に火を掛けてから百五十騎の軍勢を率いて船上山に駆け付けた。

更に、長年の一族に名和七郎と言う知恵者が居り山に入るや直ちに白布五百反を使って大量の旗を作つた。其れを松葉で燻し、家紋を書いて山中に立てたのである。是により大軍勢が城に籠つて居るよう見えて誠に勇壮なことであつた。

### ○船上合戦（ふねのえかつせん）のこと

まぎらわしいが海戦の事では無く地名である。名和一族が挙兵したので幕府は隠岐判官・佐々木弾正に命じて三千余の兵に船上山を攻撃させたのである。其処は七百メートルの大山（だいせん）に続く六百メートル程の小山で三方向が断崖絶壁であるから攻め難いが本来の城では無いから堀も無ければ堀も無く、大木を切り倒して並べたり、堂舎を壊して楯代わりにしたに過ぎ無い。

それでも、寄せ手の三千余騎が坂道を登つて見上げると生い茂つた木々の間から、軍勢の数は分

からないが武家の家紋を表した四、五百の旗が風に靡き陽に映えて見えたから「…さては、近国の反幕府勢力が結集したか？」と不安になり「此の軍勢では攻められない！」と判断をして先には進まない。是を見た城中では、軍勢が少ないことを敵に覺られない様に射手を分散させて四方八方から矢を射掛けて日暮れを待つた。其の矢で幕府指揮官の佐々木弾正が遙か下の方に居たのに目を射られて討死したから、周りに居た五百騎ほどの軍勢は恐れて合戦に来たことを忘れ動かずに居た。

一方、佐渡から来た八百の軍勢は裏手から攻める予定であつたが、大将の前佐渡守が地形を見て状況不利を覺り早々と降伏した。隠岐から来た判官は是を知らないから対抗意識で「…今頃は裏から攻めた軍勢が敵陣に近づいたかも知れぬ！」と、千余騎で真面目に一の木戸を攻め続けた。ところが山岳地帯であるから日が暮れる頃には天候が急変して風雨激しく、雷鳴強く、とても合戦は出来ない状況になつてきた。攻撃軍は木陰などに身を寄せていたのだが、其処を守備軍の名和長重、長生兄弟が急襲したから隠岐の軍勢は慣れない場所

で谷底に追い落とされてしまった。後方に居た指揮官の隠岐判官だけが助かり小船で逃げ帰つてきたけれども、地元の人々に軽蔑されて都に行き、北条氏滅亡の時には逃げる途中に地方の辻堂で切腹し、首だけが都に戻されて晒し物になつた。

やがて船上山に居る天皇の許には西国武士団が続々と集まつて来る。広くは無い地域なので周辺十数キロが反幕府軍勢で溢れ返つたのである。太平記は巻第七まで進み、巻第八からは勢力の弱まつた幕府系軍勢と、各地に興つた天皇系武士団との合戦が本格化することになる。（続く）